

ゲージ霧らふ昇坑坑夫の鼻唄に 石原八束

（昭和三十一年作・句集『雪稜線』）

足尾鉦山に取材した二十九句のうち的一句。〈炎天の銅山肌（やまはだ）落つる崩れ石〉に始まり〈坑口の霧はやし本山坑かくる〉に至る。当時の銅山の坑夫たちの仕事の風景がある意味では生々しく浮かび上がってくる。以前に、

木枯や当引吊りの坑夫の坂 石原八束

滴りやカンテラ一つ研におき

〃

を紹介したことがあったが、上掲の作もこの群作の特徴をよく示している。この取材に当たって、八束はかなり積極的に現場の鉦山用語を収集した。「坑内（しき）」「切羽（きりは）」「導火線（みちび）」「坑壁（どべら）」「鉋（はく）」「坑口（しき）」「研（ずり）」「昇坑（あがり）」「研山（ずりやま）」「坑外（おか）」等々。

新しい季語を発掘するのと同じように、八束は現場の坑夫の仕事や生活の中から新しい言葉を俳句に盛り込もうとした。生活圏ごとに根づいて息づいている言葉は、体臭をさえ帯び

て、人間の生きる実態を如実に浮かび上がらせる。現場の作業者たちは、「導火線（どうかせん）」という代わりに「みちび」と言っていたのだろう。漢語熟語の音ではなく、和語的なもつと生な自分たちの作業実感に近い、体感的に馴染む言葉が流通していたのだ。これらのことばは、もちろん鉦山の作業内だけに閉ざされた言葉ではなく、家に帰れば家族たちの中でも流通しそのイメージと実感を地域で共有していたことであろう。

一見、得体のしれない標準語の陰に隠れているようながら、実は大変根深い熱量を含んで立ち上がる坑夫たちの言葉。その言葉を編んで現場の労働風景や生きる姿を映した句が得られまいか。八束の実証的な本質的態度がこれらのマニアックともいえる語彙収集につながったのであろう。

さて、冒頭の句であるが、「ゲージ」については、「堅坑にはゲージといふ坑内エレベーターがある」の後註がある。どのくらい深い堅坑なのか想像がつかないが、この句はその昇階機の地上の出口あたりに立ち込めている霧がゲージにも降りていくようなさまを描いたものか。その底から仕事が終わってほっとしている坑夫の鼻唄が昇ってくるのが聞こえている。「あがり」ということばの軽やかな音に、「鼻歌」も和やかで、読み手もひとときくつろぎを覚える。

鍵穴に雪のささやく子の目覚め 石原八束

（句集『雪稜線』（昭和30年作））

今月から第二句集『雪稜線』を読み直していききたい。前は、次のような鑑賞を行った。

⊕「鍵穴」という無機質な素材を用いながら、たいへん抒情的に仕上がっている句。「鍵穴」は内と外との世界をつなぐ窓口でもある。鍵穴から部屋の中を覗くというのは、よく見るシーンだが、音が入り込んでくるというのは珍しい。それまで眠っていた子が、ふと目を覚ましたまま、しばらくしずかにしている。それは、鍵穴を通して雪の降る音が聞こえてくる。それも、ささやくように聞こえてくる、というのだ。メルヘン的な装いの中にもなんと静謐無垢な時間が流れていることよ。

もちろん、この句からは、三好達治の詩「雪」が思い起こ

されるが、太郎次郎を眠らせる雪の詩は、日本古来の家屋であるのに対して、この句は都会的で近代的な佇まいを感じさせる。また、三好詩では子どもは二人だが、この句では一人時代の流れに沿いながらも、その中から詩を紡ぎだそうという八束の姿勢が見える。▽

さて、近代的なアパートなどの「鍵穴」の風景から、さらに半世紀以上経った今日、都会ではボタン式の施錠、暗証番号による電子ロック、スマホ操作によるオートロック等々、徐々に増えている。あと五十年後には、八束のこの句はどのように感覚され理解されるのだろうか。

先週、栃木県黒羽の中学校で出前授業をさせていただく機会に恵まれた。全校百八十名くらいだったが、ここで長塚節の〈垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども〉を紹介したついでに、「蚊帳」を知っている人？と聞いたら、それでも半分かかくの生徒が手を挙げてくれた。少し安心した。でも東京ではこうはいくまい。

ちなみに、前記の三好達治には、〈水に入るとくに蚊帳をくぐりけり〉の名句があるが、夜気の涼しさとも無縁ではなからう。夜涼も都会では縁遠くなりつつある。前掲の八束の句が夏に詠まれたら、この蚊帳の中での子の目覚めになったかもしれない、などと愚考をしてもみるのだが。

憂苦雷菜蹴ルト春雷ノ音ヲ出ス 高山れおな  
ウクライナ爆破菜の花放射状 恩田侑布子

それぞれ『俳句』五月号、六月号より。昨今、新聞や雑誌にもロシアのウクライナ侵攻を詠んだ句が散見されるようになってきた。コロナ禍や戦争など悲惨残酷な事実を訴える重みは、生と死という根本に深くかわる。

また、遠隔地からの「想望」的な俳句も、想像力を含め現地の思いに心をより深く添わせる意味で大切かと思う。テレビやインターネットでの情報は真偽も含め多種多様。その中から自分なりの情報を抽出し、イメージを造形する。客観的な立場から、ものの本質を掴み出す可能性もある。

さて、上掲の二句は角川の合評鼎談の際に、私自身、答えが出なかった句である。始めから断っておくが、二句ともかなりのレベルで結実した句であることは間違いない。

一句目は、「憂苦雷菜」の造語の中にすでに濃縮した寓意性が潜む。「憂きと苦が雷のように轟めき合った国、しかしながら鎧せぬ菜のような弱さも併せ持つ国」あたりだろうか。その菜を蹴ると怒って春雷の音を出す、という句意か。俗謡風に書かれているが、蹴る主体はロシアで、ウクライナを蹂躪し、「ほう春雷の音がするじゃないか」と嘲笑している。一方、ウクライナにしてみれば、「春雷の音を出す」くらい

の気骨はあるぞ、と抵抗の自負を持つ。問題は、「春雷」の心情をどのように理解したらよいか。「春雷」の季節感から俗謡風のおおらかな雰囲気も感じれば、その陰画めく凄絶な生者死者の叫喚とも感じられる。最後の答えが出なかったのである。

また、「憂苦雷菜蹴ルト」を「ウクライナ・ケルト」と解釈する読みもある。ただ、「蹴ルト」はカタカナの送り仮名とも相俟って、まずは直感的に動詞として目に飛び込んでくる。実際、この解釈が可能ならば、まっとうに届いてくる「春雷ノ音」だが、同様にこの読みを支持する自信がなかった。

いずれにせよ、十七音の短詩の中で、ここまで重層的な物語性を編まれたことに驚いた一句であった。

二句目は、高山作とは異なり、暗喩性の強い明快なイメージ句である。この菜の花は、青空と黄の麦畑を表すウクライナの青黄旗の「実りの麦」よりもか弱い幼い命たちを想い重ねているものか。下五に、爆撃禍の大きさと残酷さがデフォルメされながら、シンプルイメージとして深い陰影を孕んで提示されている。ここまで第三者的に描いてよいのかという意見もあるかもしれないが、この一句にも戦争の深い本質を感じとった読者が少なからずあるのではないかと思う。

どちらの句がよいというのではない。俳句の潜在的な短詩の豊かさを改めて思い知らされた句として、ここに紹介し、一日も早いロシアの撤退を心から祈るばかりである。

野をかへる牛の背に憑く雪ほたる 石原八束

（昭和十二〜十六年作『定本秋風琴』牧羊社刊）

『定本秋風琴』には、第一句集の『秋風琴』に対して、八十句ほど拾遺の作がある。この句もその一つ。〈落鮎の築しろじろと日照雨けり〉〈寒能や天女の舞ひのまくれなぬ〉などと同様に初期の句である。改めて鑑賞しておきたい。

上掲の句は、第二句集『雪稜線』所収の

仔馬帰る月夜雪稜線を負ひ 八束

のプロトタイプの句だ。主役は牛で、雪蛍が付きまとう。『秋風琴』にも、〈おおかみに蛍が一つ付いていた 金子兜太〉の名句があるので、この句も影が薄くなってしまうが、八束の初期の翳りを引いた抒情の質を見ることが出来る。

最初の句は、そろそろ山里にも雪が降ってくる時期なのであろう。牛が野を帰るあいだ、雪蛍がお守りのように光って付き添っているようで、メルヘン的な抒情もあるが、儂げな心細さも伝わってくる。この句では、人間を介在させず、野と牛と雪蛍だけを登場させている。この句を読んであたたか

さを感じたとしたら、それは、牛と雪蛍が、たとえば一緒に帰る父子の風景のようにも見えるからであろう。同時に、淋しさを感じるとしたら、それは雪蛍の儂さに触れざるを得ないからであろう。

雪蛍は、地方によっては「雪ばんば」や「綿虫」「大綿」「雪虫」などとも呼ばれる。〈綿虫やそこは屍の出でゆく門 石田波郷〉のこの「綿虫」と、八束の「雪ほたる」は同じ質の登場の仕方をしているのかもしれない。

と、ここまで以前に書いた内容だが、今回、この句について考えているうちにもう一つの句に出合った。

老人と綿虫のゐる個室かな 柿本多映

これも不思議な句だが、野山に近い施設の部屋であろうか。ちよつと窓を開けて空気を入れ替えた時にでも、綿虫が入り込んできたのである。この句は、「個室」を外せば「老人」と「綿虫」が一緒にいても驚くべきことでもないのだ。

この句と比べると八束の最初の句は、「個室」がないだけでかなり自然な設定だ。ただし、やがては、否、ただいますでに、そろそろ「老人」になりかかっている「牛」なのかもしれない、と「雪ほたる」の暗喩性に至って思う。多少強引な読みかもしれないが、「雪稜線」の句以前の八束の心象風景を改めて窺う思いがしてきたのであった。

聖夜来ぬ「聖ヴェロニカ」の目色にも 石原八束

（昭和28年作 句集『秋風琴』・書肆ユリイカ刊）

「ルオーの作」と前書がある。この年、大規模なルオー展が上野で開かれ、八束はルオーの絵の「深い哀しみ」の虜（とりこ）になってしまった。私もルオーは大好きだが、そのきっかけはこの八束の句だった。この「聖ヴェロニカ」は、ゴルゴダの丘に向うキリストの汗を拭き取ってあげたとされる心やさしき伝説の聖女。絵画の方も、太い線による力強い輪郭の中に、この上ないやさしさが秘められて、聖女の顔がたいへん美しい。八束もルオーの中でこれが一番好きだったのではないか。

いまから三十五年ほど前（昭和六十一年）の春、俳誌「秋」の句友たちが南欧の吟行の旅の帰りにパリに寄られた。その時期フランスのナントに私費留学していた私は、八束先生に手紙を書いて「どこでもよいから一泊させていただきたい」と頼み込んだところ、先生と同じ部屋に泊めてくださった。

こんなうれしいことはなかった。翌早朝、先生とオペラ座近くまでゆつくり散策をしたことも、いまとなつては貴重で懐かしい思い出になった。

話は戻るが、パリ見物をした際、パリのポンピドゥー国立近代美術館のフロアの奥に、偶然ルオーの小さなコーナーを見つけた。もちろん、「ヴェロニカ」(Veronique)の絵も。それをお伝えたとき、八束先生の喜んでくださったこと。予期せぬ再会に、懐かしさのこみ上げてくるような面持ちで、しばらくこの絵に見入っておられた。普段はリゴリズムの八束の、こういうときの安らいでいく表情は実にいい。いつまでも続いて欲しいと思う無垢な表情であった。

赤き帆はルオーの墓標柳絮飛ぶ 正美

私がこの句を成したのもこの時だった。

さて、このヴェロニカの目の色に、壮年の八束は何を感じとつたのだろうか。ヴェロニカの目は左右とも優しさを湛えて清らかだが、左の下目蓋あたりがうつつすらと曇っていて、涙を溜めているようにも感じられる。この句の二句後に（凍てて痺れ睡眠剤をもてあそぶ）とあるように、この時期、八束は精神的に切迫していたようだ。八束にとっては、心の救いの絵ともなっていたのであろう。

## 母がもぐ白繭黄繭露の中

石原八束

（昭和十六年作・句集『秋風琴』・書肆ユリイカ刊）

西脇順三郎の『ambaryalja』の有名な「覆された宝石」のやうな朝／何人か戸口にて誰かとささやく／それは神の生誕の日」の郷愁的山国版とでもいえそうな句だ。やわらかく淡い色合いの繭は、山国の宝石であるにちがいない。

実は、蚕は数千年かかって家畜化されたもの（家蚕）だが、その他に世界中の野山には家畜化されていない野性のもの（野蚕・やさん）も沢山生きているそうだ。我々は繭と言うと白をまず思い浮かべるが、原種は黄色で、白い絹が好まれたため、日本では白が代表種となったようだ。

私の故郷の古河市でも、昔は桑畑があったり、ちよつと路地を入ると、繭を煮る匂いが漂ったりしていたものだった。私はあまり好きな匂いではなかったが、少年時代の記憶の中にブルーストのマドレーヌの如く刷り込まれてしまっている。さて、八束の父・舟月は実業家で「雲母」の重鎮でもあつ

たが、事業を起すために甲州から上京した折、八束は病弱だったため郷里に祖母と残される。そのため、十三歳から六年間を祖母と暮らすことになる。思春期の多感な時期を母と離れて暮すことが、八束のその後にどのような影響を与えたかは不明だが、後の肺結核の療養と相俟って、文芸に自分の世界を求めていく契機になったかもしれない。

上掲の句は、父が上京する以前の、母との懐かしい時間を回顧したものである。母・さと乃との少年時代の思い出の一齣がやわらかい光に包まれて浮かび上がる。若い母のそばで白繭や黄繭が次第にたまってゆくのを見つけている少年八束。八束の母親に対する憧憬を含んだ幸福な時間であつたに違いない。

もちろん、白繭が実際には多いのだろうが、そこに黄繭が混じっていることが自然で素朴に感じられる。繭の白と黄の織りなす淡々とした色彩は揺籃期の至福感を伝えるかもしれないが、作者はさらにそれらを露の光の中に照らし出す。母子と白繭黄繭を包むような小世界がほんのりと浮かび上がるのはそのためだろう。だが、その宝のような時間は、やがて露の光と共に封印されてしまったのだった。

小品ながら、この季節になると、懐かしく思い出す少年八束の風景である。

雪の上を死がかがやきて通りけり 石原八束

（昭和二十八年作）

句集『秋風琴』・書肆ユリイカ刊）

「二月二十五日齋藤茂吉氏逝く」の前書がある。戦後のこの時期の茂吉がどのくらい大きな存在であったか、その頃まだ生まれていない私には想像がつかない。しかし、私の父の世代の歌人や俳人はたいして茂吉を語り、歌集を語る。八束も『茂吉ノオト』に耽溺した時期があった。たとえば「たましひを育みますと聳えたつ蔵王のやまの朝雪げむり 齋藤茂吉」(『小園』)あるいは「へのだ赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり 同」(『赤光』)などに知られるように、茂吉も蛇笏同様に「たましい」を見えるように描いた作家だ。

八束の追悼句がどの短歌を底敷きにしたものかは不明だが、この句では、「死」がまるで「魂」になって光り輝いて過ぎ去ったようだ。もともと目には見えない「死」という不可視の観念を、「死がかがやきて」「通りけり」とイメージ化する

ことよって、まさに見える「モノ」のように表現する。その意味では、〈原爆地子がかげろふに消えゆけり 八束〉の句よりも、さらに句風を進めた地点にこの句はあるといえよう。

ここで、前述の論考にて言い落としていたことを一つ付け加えておきたい。八束の師であった蛇笏には、「芥川龍之介の長逝を悼みて」の前書付きで、

たましひのたとへば秋のほたるかな 飯田蛇笏

がある。この蛇笏の句を深く学び取って蘇生させたのが八束の冒頭の句だというのが、飯田龍太の見方であった。八束の第一句集『秋風琴』の巻尾の句集解説「求光の詩」(飯田龍太)は、石原八束の初期の句業を知る上で読み過ごすことのできない鋭利な批評だ。

そして、最晩年、八束のこの句のはるか延長上に、次の句があることも言い添えておいてよいだろう。前書に「盟友鈴木詮子逝く」とある。

邯鄲の夢とも空をゆく火とも 八束

『春風琴』(平成九年作)

ここでは、「死」とも「たましい」とも言っていないが、たしかにこの「火」の一語にもこの世を飛び去ってゆく「いのち」の輝きが象徴的に表現されていると言つてよいだろう。

■ 続・らくだ日記（七十八） 佐怒賀正美 ■

## 霧迅しノートルダムが動きくる 石原八束

（昭和四十六年作・句集『高野谿』・東京美術刊）

この句は、もちろん昔のパリのノートルダム大聖堂。冬霧が速力を増して流れてゆく。ふと見上げると、ノートルダムが黒々と動き迫ってくるように感じられた、というのだ。霧の中から突如現れた大寺院の影。その威容に押しやられそうになる印象を八束は初めてのパリから受けた。

パリの文化は、映画や化粧品やモードなど、きらびやかで洒落たものばかりではなく、庶民的な息づかいに加えて、他方に剛直で荘重なものがある。革命に至る歴史の重みが黒々とした厚みになって残っている都市。それもパリだ。この句は、太く簡潔な表現で、野獣のような歴史の息を生々しく捉えた瞬間でもあった。

この句に絡んで、八束は「海外吟と季語」について述べている。『俳句研究』昭和六十一年二月号）この頃はまだ海外吟に否定的意見が多かった。八束が最初に欧州旅行をした昭和四十六年であれば、尚更のことであつただろう。

「日本で育った季語が外国に通用するはずはないからとい

う理由が主で、欧州で作られた俳句などを認めようとならない俳人も多い。（中略）むろん万を超える日本の季語の全部が欧州に適用できるはずはない。が日本の季語と同じ季語となるものも、季節や気象だけでなく動物・植物などの生物や衣食住の人事まで、ずいぶんと多い。（中略）新鮮な欧州の風物人事は私の作句主題として最も魅力あるものでもある。自分の人生を内省するには内外の旅に出るのが一番いいことも事実だ。」八束は本当によく旅をした。

海外吟詠は、虚子、青邨はじめ、先人の積極的な試行につき、有馬朗人、鷹羽狩行なども行って、新しい世界をひらいてきた。いまでこそ理解者も多いが、開拓者の行動には強い好奇心と信念が感じられる。

同じくフランスでの作からは、〈モナ・リザの微笑を仰ぐ手套ぬぎ〉（凱旋門さして落葉の灯がのぼる）〈白無垢のリドのボアの女客〉などを引いておこう。フランスは若い頃に八束がいちばん訪ねたかった国の一つだった。というのも、三好達治はじめ当時のフランス文学者たちに多くの知遇を得て、その著書を多読し、詩や文学について知識を蓄えていたからだ。

来月七月十六日には二十四回目の八束忌がやってくる。



夕暮は一人を気取る梨の花 佐怒賀由美子

（句集『仔猫跳ねて』二〇二一年・本阿弥書店刊）

本書はこの十年間の作品を収めた第四句集。高校の教師としての退職記念の句集でもある。

あとがきに「ありがとうミーちゃん、ちゃねとら、かためちゃん。その他ご近所の猫の皆様」とあるように、作者の友だちは人間以外にも身近にいっぱい。〈月今宵手負ひの猫に水飲ます〉〈秋めくや猫に不出来のあれば庇ふ〉〈片目猫が真つ直ぐ歩く朝曇〉〈仔猫跳ねて転げて跳ねて並んで行く〉など、けなげな猫への思いが素直に伝わる。

また、猫への愛情は、小動物への共感性にもつながる。〈枯枝を立て子ねずみの墓標とす〉〈退く時の蜥蜴の手足美しき〉〈選択肢少なし秋のかたつむり〉〈子蟪蛄急ぐそれぞれの未来に〉なども独特の感受性が働いた句である。

ところで、作者はこの十年間に、俳句の恩師の松本旭・翠夫妻、長く看取ってきた実母との永訣を体験した。両師に対しては、それぞれ〈師の鼻に秋の終はりの陽が届く〉〈梅雨空の

上に久遠の空のあり〉と鎮魂の句を。一方、母との思い出は、〈処暑の夜のコトリと母の指輪置く〉〈病室に秋の日遠くから届く〉〈母見舞ふ右も左も花菜の黄〉〈此岸の母深く息して六月来〉〈母の息終はる梅雨空白々と〉と心のゆらぎを具体物に映して深い陰翳の抒情句を詠んでいる。

教職に専念してきた作も引いておこう。〈茶封筒ドサリと置いて初仕事〉〈式次第の字配り春はたけなはに〉〈明日の手順描いて眠る雪の夜〉〈咳が咳に応へて午後の職員室〉など。〈麦秋や軽トラックが跳ねて行く〉は、案外、若い頃の作者の通勤風景かもしれない。

また、作者の人となりが見える句も軽快。〈ため息は二度までにして冬至風呂〉〈金魚飼ふふは生きるふりをして〉〈生きづらき世の缶ビール持ち帰る〉〈鬼百合や言葉吐き捨ててはみても〉〈薔薇の芽や気分次第のスケジュール〉など、作者は何よりも自分を恃んで正直に生きてきた。

冒頭の句は、おそらく多忙な教職生活の中、昼間の繁忙から離れて、素の自分を取り戻す自己対話のひとつか。夕暮れに一人、白い清冽な梨の花に向き合って、ちよっとだけ気取ってみる。それは明日へ向けての小さな背伸びの自愛の儀式かも知れない。足元に仔猫が寄ってくるかも。

## 凍滝のなか月光の氷りたる

高岡 修

（句集『凍滝』二〇二〇年・ジャプラン刊）

作者の第八句集。氏は詩人でもあり、既に十九冊の詩集を出されている。現代詩的感覚で攻めた句集でもある。永遠が疲労を見せて振り返る

### 縁がわという急流を死馬流れ

### 入水者のまぶたが青く積もる水

現代詩的な発想と方法意識を追求している作が目立った。これらは無季の俳句だが、一句目は、「永遠」という概念が主人公。人類が永遠と信じ神格化していたものが、現代では疲弊し始めている。この擬人化は〈戦争が廊下の奥に立つてゐた 渡辺白泉〉を思い出させる。二句目は、「縁側」がいっしょか「縁川」へと意識の中で変容する。縁側の両端がどこまでも伸びて、さらに急流になって、記憶の上流から死馬が流れ過ぎてゆく。三句目も意識の中で青いまぶたが水に積もっていく。かなり怖い映像だが不思議な感覚だ。

他にも作者の句には、

蝶の骨顔にかくして山河とす

鶴ほどく眼の凍雲を採寸し

逃げ水の始原でありし死せる虎

白鳥を糶し夜明けのマスクとす

など死を起点とした超現実的なイメージが散見される。非日常的な難解性はあるが、それぞれの言葉が水先案内人だ。

立棺の都市化粧して芥子を吸う

物質の快(け)楽(らく)に垂れて銀河死す

月光を裂き月光の血に痴れる

展翅函花野を掛けてあげようか

一方で、これらは有季の句だが、現代的危機感を仄めかすために季語の暗喩性を活用しているとも言える。四句目以外は季節感にさして重きはない。三句目は内面的な死と快樂の詩的体験か。私自身は無季の句作を必ずしも推奨しないが、文芸として無季の秀品を拒む理由はない。詩集十九冊あってこそその詩的熟成の句だと思う。

さて、これらの現代的詩性を堪能した果てに、巻尾にて冒頭掲出の句に出合う。凜とした寒月光が凍滝の内部で精神として感受されたかのようだ。凍滝内部の光を脱いで、作者はようやく長い超現実的体験から現実世界に立ち戻ったのだろう。次の展開も楽しみだ。益々のご活躍を。

## 南洋に虹じゃんけんの一万年

橋本 直

『符籙』二〇二〇年・左右社刊

本句集は〈貂の眼を得て雪野より起き上がる〉〈雪原を踏む鍵盤を鳴らすこと〉の二句から始まる。一句目は比喩がシャープで、犀利な句である。醒めた意識の句、というよりも事実を分析し編み直しているような句とも言える。再構成の作業の内に、体感性を獲得してしまう。ふつうには〈貂の眼をもつて雪野を起き上がる〉でもよいところだが、作者にとつては、「得て」の時間性と「より」の剝離感がどうしても欲しい措辞なのだろう。もちろん、賛否両論あることは予測済みだ。第二句については、雪原の底に巨大な音源を感じ取っているような句だが、ふつうは手で奏でる鍵盤を、作者は足で鳴らす。黒鍵の半音階も含めて深く雪原から立ち上り交響する音に包まれ、雪原を進む。この句においても、「ごと」の措辞によって、鍵盤を鳴らす行為の虚構性を明確に示す。二句とも、細かな神経を措辞に注いでいるのに、それが全体としては隙のない文脈を成し、大らかな原初的風景との新鮮

な共振を果たしている。

〈幾らでもバナナの積めるオートバイ〉〈聖樹いつも星に吸はれてゐる形〉〈熊蜂のはばたき風に間に合はず〉〈夏休みアナウンサーが舌を出す〉〈元日やあまたの猫は人の顔〉と読者をすつかり寛がせてしまう笑いの句がある一方、〈寝転んで日向で殺す秋の蟻〉〈糶果ててゆくところなき撞木鮫〉〈要塞に子猫ののぼる椰子の花〉〈朝影の死の遠くある頭蓋骨〉〈百舌叫び鋭き山本美香忌なり〉など鋭敏な批評が底に忍んでいる句もある。この振幅をわがものにしながら、作者は現代俳句としてのプラスαを追求していくのであろう。作者の俳句の新しい進展に期待するところは大きい。

最後に、上掲のフィリピンでの作に触れておかなければならない。南洋に虹がかかった。大きな虹である。その浜辺では、子どもたちがじゃんけん遊びをしている。大仰だが、一万年も昔から子供たちはじゃんけんをしながら、スコールを過ごし、虹を仰いできたのだろう。作者の作品には、「記憶」を引き継いでゆく時間軸が親しく現れることがしばしばあるが、この句もその一つ。この大らかで健やかな時間を眺める作者の眼裏には、この至福の時間が未来へも続くようにという祈りも感じられる。こんな「じゃんけん」の仲立ちも俳句の力になるとは愉快である。